

ナボコフが付けなかった注釈

ナボコフ訳注『エヴゲーニイ・オネーギン』を貫く政治的姿勢について

秋 草 俊 一 郎

1

『オネーギン』翻訳と注釈、この仕事によってナボコフは自身の名をただの作家としてではなく、優れた文学研究者としても文学史に刻み込むことに成功した。後年、彼は自分に寄せられた反論に「詩人として二流と言われればほほ笑んですまさらうが、学者として二流だと言われれば持っている一番重い辞書に手を伸ばすだろう」¹と答えているが、この並外れた注釈の出版以後、『オネーギン』研究を志す人間ならその存在を無視することはほとんど不可能になってしまった。実際、ナボコフのあまりに直訳的な翻訳のぎこちなさに悲鳴をあげる読者でも、注釈書のほうには有用性を認めないわけにはいかないようだ。

ナボコフは序文やインタビューでこの翻訳と注釈を“pony” (I x)² であり“crib”である³と呼んだ。この二語はスラングとして「アンチョコ」、「虎の巻」といった意味を持ち、ここでもその用法で用いられている。しかし元来は「子馬」「ベビーベッド」という意であり、ナボコフの言葉遊び好きを知っているこちらとしては、そもそもの意味のほうも意識せざるをえない。これは一見ナボコフが自分の労作は読者がロシア語に親しみ、背景知識を十分に得るまでの間の代替品に過ぎないと、がらにもなく謙遜しているようにも思えるが、実際のところその真意をよく考えてみれば、謙遜の意よりも、読者を「赤ん坊」扱いしているだけな感は否めない。こうした尊大さ、自信はいかにもナボコフらしいと言えそうなものだが、そこに詰め込まれた博識を前にして圧倒されないものは少ないのではないだろうか。ポーランド語訳やドイツ語訳など自分に参照できる翻訳はすべてチェックする。初雪の記述があれば、その年の本当の初雪はいつだったのかを調べる。文学的アリュージョンに関する膨大なリファレンス。銜学の極みとも言えるようなこの仕事ぶりには——そ

¹ Vladimir Nabokov, *Strong Opinions* (New York: Vintage International, 1990), p. 241.

² 括弧内引用は Aleksandr Pushkin, *Eugene Onegin: A Novel in Verse* (Princeton: Princeton UP, 1975)からとし、何巻かをローマ数字で付記することにする。

³ “My only ambition has been to provide a crib, a pony, an absolutely literal translation of the thing, with copious and pedantic notes whose bulk far exceeds the text of poem” Nabokov, *Strong Opinions*, p. 7.

こに瑕瑾があるにしても⁴——ただただ圧倒されてしまってもおかしくない。

もちろんナボコフの「ベビーベッド」発言を真に受けるならば、私たちが読者として成熟しひとり立ちできるようになったあかつきには、この注釈書は登りきった梯子のように投げ捨てられるべき存在のはずだ。しかし、この巨大な注釈を読むというのはどういうことなのであろうか。私たちはナボコフがつぎからつぎへと取りだすものを消化するのに精一杯で、そこに欠けているものを意識することがない。それゆえこの書物を傍らにおいて読書するものは、ミニチュアールもさながらの注釈を読めば読むほどそれを批判する能力を失ってしまうのではないか。ベビーベッドから出る、それはナボコフと同じ地面に立っただけを言えるようになることだが、いつしかベビーベッドの中で読者としての生涯を終えてしまうのではないか。

『青白い炎』において注釈者キンボートの注釈を読みふける読者が、いつの間にか架空の王国ゼンブラの幻影に囚われて、本体であるはずのシェイドの詩「青白い炎」以上にその内容に魅了されてしまっているように、ナボコフの注釈書も『オネーギン』探求の目的でそれを読み始めた読者の心を捕らえてしまいかねない。本論ではナボコフの『オネーギン』注釈をナボコフ研究の文脈に置き、⁵ そのことで生じる問題点について論じてみたい。その際巨大な注釈書の「すべて」に触れることは紙幅の都合もあり不可能なので、ナボコフの政治意識に関するものを中心に扱うことにする。

2

いくつかの論文がナボコフにおけるこの領域にアプローチしているが、その方法にはパターンがあった。それは長編『断頭台への招待』や『ベンドシニスター』などをソ連やナチズムによる独裁と関連付けて論じることである。⁶ だが、こうしたアプローチがどれだ

⁴ この注釈書の一般的に述べられている長所・短所を含む評価については Alexander Dolinin, “Eugene Onegin,” in Vladimir E. Alexandrov, ed., *Garland Companion to Vladimir Nabokov* (New York: Garland, 1995), pp. 117-30 を参照するのがわかりやすい。

⁵ ニコラス・O・ウォーナーは「主題の重要性や技術的な完成度の点から考えても、こうした短い注をみると、ナボコフのより長い脱線同様、私たちは彼の注釈を慣例的な批評的分析の産物ではなく、クリエイティブな想像力の産物として自立した芸術作品であるとみなさざるをえない」と述べ、それぞれの注釈を独立した研究の対象とすることを主張している (Nicolas O. Warner, “The Footnote as Literary Genre: Nabokov’s Commentaries to Lermontov and Puškin,” *Slavic and East European Journal* 30 (1986), p. 177) が、そのようにナボコフ注釈を「作品」としてその解釈の傾向を分析したものとして Leona Toker, “Fact and Fiction in Nabokov’s Biography of Abram Gannibal,” *Mosaic* 22:3 (1989), pp. 43-56. や Vera Proskurina, “Nabokov’s Exegi Munumentum: Immortality in Quotation Marks (Nabokov, Pushkin and Mikhail Gershenzon),” in Jane Grayson, Arnold McMillin and Priscilla Meyer, ed., *Nabokov’s World Volume 2: The Shape of Nabokov’s World* (New York: Palgrave, 2001), pp. 27-39 があるが、本論もそこに連なる。

⁶ たとえば Leona Toker, “‘Who Was Becoming Seasick? Cincinnatus’: Some Aspects of Nabokov’s

けの成果を挙げているのかということについては疑問が残る。

私はナボコフの政治観はむしろ作品よりも、文学作品の読み解き方にこそ見いだしやすいのではないかと思う。特にロシア文学やソヴィエト文学と対峙したときにそれは鮮明なものになる。作品の背景となっているロシアの歴史や当時の政治状況について言及する機会が多くなるからだ。一般に、ナボコフは文学における政治性を蛇蝎のごとく嫌った人物として知られている。彼はゴーリキーなど政治と密接に関わった作家を生涯評価しなかったし、文学にそのような解釈が行われることにも強い反発を示した。あるインタビューで「私は自分がなんの社会的な主張をもたない人間であることを誇りに思っている。[中略] 政治的な小説や特別な意図をもって書かれた文学ほど私を退屈させるものはない」⁷と述べているほどである。

序文で「プーシキンの作品は第一に文体の現象である(I 7)」と定義したナボコフは、『オネーギン』を政治的に解釈しようとするソ連の注釈者たちに対して「グロテスクだ」と攻撃的な態度を表明している(II 380)。ナボコフはプーシキンがデカブリストの乱に関わっていたという東側の注釈者に対して異を唱えている(III 349)し、17世紀のコサックの反乱を指揮したステンカ・ラージンに付けられた注釈ではソ連の注釈者たちに皮肉を言っている(III 279)。

数多いプーシキニストの中で、ナボコフが攻撃の目標として選んだのは先行して『オネーギン』注釈書を執筆していたブロツキーであった。もっとも、ブロツキーの注釈はソヴィエトの学者からも「行きすぎである」として咎められるほどの内容であった⁸から、ナボコフの舌鋒が鋭くなったのも理解できないことではない。だがその批判の口調はあまりに辛辣で、学問的な目的からは外れた個人攻撃とさえ映ることも少なくない。

この連につけられたブロツキーの注釈は恥知らずなほど醜悪である。このソヴィエトのおべっか使いは、奴隸的な熱心さでプーシキンがまじめくさった革命の崇拜者だったと証明しようとして、「美的な」あるいは「テキスト論的な」方法ではなく、「歴史的な」かつ「イデオロギー的な」ものを適用しようとしているのだ。(III 363)

テキストのあらゆるところからボリシェビズムを引き出そうとするブロツキーをナボコフは許さない(II 164, III 160, 320)。注釈書においてブロツキーに代表されるソ連の注

Treatment of the Communist Regime,” in *Nabokov: Autobiography, Biography and Fiction* (Nice: Departement d’etudes anglophones de la Faculte des lettres et sciences humaines de Nice, 1993), pp. 91-98. など。

⁷ Nabokov, *Strong Opinions*, p. 3.

⁸ *Иваненко А. Н.Л.Бродский. Евгений Онегин, роман А.С.Пушкина // Пушкин:временник Пушкинской комиссии. 1941. №4. С. 526.*

積者たちは、論争こそ引き起こさなかったものの英語圏のほかの翻訳者たちと並ぶナボコフの仮想敵であったことに注意すべきだ。この本で罵倒された数多くの作家、翻訳者、研究者の中でブロッキーほど激しい批判の対象になっている人物はいない。だがゲルシェンクロンが指摘していたように、「ナボコフのほかの注釈者についての意見は慎みや公正さを欠いている」⁹ だろう。いかにナボコフといえども、先人の業績がなくては不明だった点も多かったし、断わりなしにブロッキーの注釈を借用している箇所も多いのである。

こうした姿勢は小説の内容にそくした場面においても変わらない。それは作者プーシキン同様、小説の主人公オネーギンをどのように扱うかといった点にも表れている。ナボコフはオネーギンが当時の歴史的な潮流のもとで、実際の人物のように読まれることに抗議している。ナボコフが反駁するのはオネーギンをソヴィエトに都合のよい革命的な人物としてとる読み方である。芸術はルポルタージュではないとナボコフは訴える。そのことによって、芸術家が作り出した偉大な被造物は一つのありふれた「典型 “type”」に矮小化されてしまう、と(II 48, 53)。ある場所では「芸術の現実と歴史の非現実のあいだの差を強調するために、私はいままで、文学の様式化された登場人物の『モデル』を求めるといふ退屈で根本的に的外れな探求を相当詳しく検討してきた」(III 177)とも述べている。「芸術の現実と歴史の非現実」という表現からもうかがえるように、天才が作り出した芸術こそが絶対的な「真実」であるとナボコフは訴えている。こうした例はほかにもいくつも挙げることができるが、一番ふるっているのは次の注釈だろう。ここでは「典型」が逆手にとられている。

「典型」(ロシアの批評家たちの常套句)としてのタチャーナはツルゲーネフからチェーホフまでのロシア作家たちの作品の中の女性登場人物の母であり、祖母である。[中略] 1917年11月の革命の直前、タチャーナはロシア文学から、そしてロシアの生活から消え、重い靴をはいた実務的な男たちがロシアの文学や生活のリーダーシップを引き継いだ。ソヴィエト文学において、タチャーナのイメージは彼女の妹のオリガによって取って代わられた。オリガはいまや豊かな胸に、赤らんだ頬をして、騒々しいほど陽気である。オリガはソヴィエトの小説に出てくるよき娘である。彼女は工場でものごとを解決し、サボタージュを見つけだし、演説をして、完璧な健康を発散している。

もしこのように正しい精神で用いれば、この「典型」は極めて愉快的なものなのである。

(II 280-281)

タチャーナを「ロシア女性」の「典型」としてみるのはベリンスキーなど多くのロシア

⁹ Alexander Gerschenkron, “A Manufactured Monument?,” in *Modern Philology* 63:4 (May, 1966), p. 342.

の批評家が行っていたことであるが、ナボコフはそんな女性がソヴィエトに存在しないことを述べ、妹オリガに「ソヴィエト女性」の「典型」を見いだして皮肉っている。これこそ「典型」のパロディとも言うべきものだ。注釈の末尾で、ナボコフは自分のほうにこそ「正しい精神」があると宣言する。これはもちろん半ば皮肉であるが、半ば本気のものだろう。ソヴィエトに対する憎悪はそれを容易に正当化しうるほど強いものだ。

また「天才による芸術作品」という神話を奉じるそぶりをする一方で、ある注釈ではナボコフは自分がこの韻文小説の登場人物を「典型」や「現実」の人間として読むことに抗議する理由を「最近、ソ連の観念論者たちがオネーギンのイデオロギーをかなり理想化している。そしてこれこそが、この注釈において私が彼のことをあたかも『現実』の人間であるかのように議論することを避けている唯一の理由なのである」(II 227)ともらしている。私たちは一般的な芸術至上主義者といったイメージからナボコフが政治的な解釈を退けていると考えがちだが、むしろこうした態度はソヴィエトの注釈者たちに対する過剰なまでの対抗意識によって形作られたもので、芸術至上主義とどちらが先にあるとははっきりとは言えないものだ。それはナボコフという人間の持つアンビヴァレントな二面性であると言ってよい。その過剰なまでの批判や対抗意識は、逆に彼自身の政治的な信条や立ち位置を浮かび上がらせてしまうこともある。

ナイーブな、間違っただけを教えられた現代の読者たちが革命家のメッセージをそこに見るように仕向けるために、いくつかのまったく間違っただけ、政治的に触発された考えがソヴィエトの注釈者たちによってプーシキンの上記の頌詩につけられてしまった今となっては、頌詩「自由」は「法」[中略]こそが彼にとっては自由の分配における第一条件を表し、バイロンの詩行にまったく基づいている保守的な若きリベラルの作品である、ということをいくら繰り返しても繰り返したりない[後略]。(III 337)

ナボコフは「自由」が革命的な身振りを表現した作品ではないということを証明するために、それを全訳し詳細な注釈をつけている(III 338-340)。だが、ここでキーワードとなるのはプーシキンを指すために使われている「保守的な若きリベラル」というフレーズである。あるインタビューで、政治的な姿勢を問われたナボコフは「私の父は古いタイプのリベラルだったが、私もそうとられることになんの依存もない」¹⁰と答えているが、それとナボコフの主張するプーシキンの政治的な信条は一致しているのである。

つまりナボコフはある意味でソヴィエトの注釈者たちと同じこと、対象となる作家を自分自身の政治的な信念にひきつけて読むということを行っているのである。問題となるの

¹⁰ Nabokov, *Strong Opinions*, p. 96.

は、これが無意識的なものか、意識的なものなのかということだろう。私はこれから見ていくようにそれはある程度までは意識的な操作であると思う。そしてそれこそが彼が唯一持ちえた「社会的な主張」ではなかったのではなかろうか。

3

前節で見たのは注釈に滲みでる「反ソ感情」とでも言うべきものだったが、それはソヴィエトの注釈たちの政治的な解釈を媒介にして引き起こされるものばかりとは限らない。ナボコフは実にイマジネーション豊かな——「作家」的とでもいうべきような方法で『オネーギン』のテキストに未来のソヴィエトの暗い影を発見する。それはソヴィエトの注釈者たちがポリシェビズムの兆しを見いだすのと対照的であると言ってもよい。

第1章 17連 7行目につけられた注釈では、プーシキンの書簡が引用されるが、そこで言及されている「屯田兵制度」についてナボコフは詳しく解説している。

1819年の若い自由主義者たちは屯田兵制度を激しく非難した。これらは平和時に巨大な軍隊を保持するコストを削減するために1817年に設立され、アレクサンドルI世の軍事顧問アレクセイ・アラクチャーエフ伯(1769-1834)によって指示された。これらは国家が保有する農民(地主が所有する農奴ではなく国家に属する農奴)によって形成されていた。[中略] 屯田兵たちは厳しい訓練と、ごくささいな軽罪にも厳罰が与えられる中で、軍事行動と農業を両立させなくてはならなかった。「屯田兵制度」というアイデアはアレクサンドルの神秘的で几帳面な精神に大いに訴えかけたのだらう。[中略] 屯田兵制は1920年にレーニンによって設立され今(1973年時点)¹¹ なお栄えているはるかに効率的かつ広範囲なソ連の強制労働所のおぼろげな未来の予見である。(II 77-78)

実際にアラクチャーエフの進言した過酷な屯田兵制は後世の歴史家たちにも評判が悪いものだが、そこにナボコフが重ねるのは「今なお栄えている」ソ連の強制労働所の影である。彼は19世紀当時の帝政下における社会状況を負の側面の継承者として、20世紀のソヴィエトを見る。注目すべきは、注釈の中で皇帝の独裁からソ連の圧制への移行がナボコフの内的な論理においてはスムーズに行われている点である。ナボコフの基準において両者は人々を虐げているという点において大差ない、地続きのものである。

皇帝の専制とソヴィエトの恐怖政治を、残酷さを根拠にナボコフは作家一流の「幻視」という方法で結びつける。この「幻視」の能力こそ、政治意識と絡めてしばしば言及される作品『断頭台への招待』や『ベンドシニスター』などに登場する独裁国家をフィクション

¹¹ 初版では(1962)となっていたが、改版するさいに(1973)に直している。

ンの世界に成立せしめるためにナボコフが駆使したものだったはずだ。こうした「幻視」はほかのところでも繰り返されている (III 207, 257n)。

分厚い注釈のさらに「付録」として付けられた“Abram Gannibal”では、ナボコフはプーシキンの祖先であるアビシニア人の少年がいかにアフリカ大陸から連れてこられたのかについて乏しい資料をもとに推量に推量を重ねる。ここでの視点は一貫してプーシキンの曾祖父ガンニバルの運命にあるが、この注釈において、ピョートル大帝は幼子を翻弄する「暴君」である(III 331, 336)。ナボコフにとってピョートル大帝は幼いガンニバルを拉致しただけでなく、故郷の地所にゆかりの人物、アレクセイ王子を殺害した人物でもある。

催眠術的なしつこさ、説得、欺きの類によって特徴づけられたこの拉致をする一連の静かな動きは私たちに今日、ソ連の兇徒による亡命者の本国への強制送還を連想させる。ナポリの保護から恐ろしい彼の母国へとアレクセイを誘い出した奴ならば、難なく哀れな黒人の子供を主人の享樂のために連れ去る方法を仕組んだことだろう。(III 419)

ここではピョートル大帝の非道な拉致の手際に、ソヴィエトによる亡命者の強制送還が重ねられている。ソ連による強制送還は亡命生活の間常にわが身を脅かしていたものとして、ナボコフはその恐怖を肌身で感じとっていたに違いない。こうしたツァーリによる独裁からソヴィエトによる支配の恐怖を引き出す注釈群から感じとれるのは、ナボコフの残酷さに対する繊細な感情と同時に、ある種の政治的な意図と呼んでいいものだ。

ここで断わっておかなければならないのは、ローティの卓抜な論文が解説しているようにナボコフは「残酷さ」というものにとっても敏感な作家であったということだ。だが一方で、ローティの指摘する「残酷さ」は単にヒューマニズムの次元に終わる話ではなく、ある種のリベラリズムと密接にかかわっていたことを忘れてはならない。¹² ここでナボコフはローティが自説で例として引用したディケンズの『荒涼館』を論じたときよりも明らかに度を失っている。ナボコフはほかのヨーロッパ文学を論じるときにかぶっている仮面——冷静な芸術至上主義者——をかなぐり捨てているようにさえ見える。かくも古典『オネーギン』注釈は政治的な闘争の場であった。

ナボコフが『オネーギン』のテキストに対して、あるいは付随的に導かれる事項に対して政治的な身振りをしている点については先行研究がほとんどないが、ナボコフの『オネーギン』について現行で唯一のモノグラフを執筆したエスキンはこうした傾向を「社会政治的な注釈者とイデオロギー批評家」と整理して、以下のように述べている。

¹² “More important, however, they both met Judith Shklar’s criterion of liberal: somebody who believes that cruelty is the worst thing we do.” Richard Rorty, “The Barber of Kasbeam: Nabokov on Cruelty,” in *Contingency, Irony, and Solidarity*, (Cambridge: Cambridge UP, 1989), p. 146.

ナボコフの自己様式化と有名な作家やその作品に対する有罪判決と同様に、この注釈書に散らばる、その一部はツァーリに統治されていたロシアと以前のソヴィエトの社会主義思想的なシステムおよび後者で実践されていた文学研究に対する作者のアイロニカルなイデオロギー批評的な意見は、翻訳とその提示の仕方を説明する議論にはあまり寄与することがない。それらはむしろ、様式化されたナボコフの人物像から文献学者「ナボコフ」を区別するのと同様に、そこから区別できるひとつのペルソナを構成している。¹³

エスキンはこうした傾向を注釈の中でナボコフが見せる多様さのひとつのペルソナとして切り離し、自身が提唱する「ポリフォニックな注釈」という解釈に組み込んでいる。しかしこうしたその政治的なスタンスを翻訳や注釈から完全に切り離してしまう議論には賛同できない。むしろ、ナボコフのイデオロギー批評的な面が『オネーギン』翻訳・注釈の深いところまで浸透しており、そこから注釈書全体を俯瞰する新たな視点を模索するほうが生産的な成果が得られると考えることはできないだろうか。次節以降はそのことについて考察してみたい。

4

『オネーギン』をベリンスキーは「ロシア文学のエンサイクロペディア」と評した¹⁴が（この意見にナボコフはくみしないが）、それは『オネーギン』が当時のロシアの“быт”についての多くの記述を含んでいるからであった。では、「当時のロシア」とはいかなる場所であったのだろうか。その例として第6章4節、地主ザレツキイが読者に紹介される場面を取りあげてみよう。ここでザレツキイは“Отец семейства холостой, (103)¹⁵ / bachelor paterfamilias, (I 229)”と描写されている。

一見何気ない箇所だが、法橋和彦はこの一節を原文とナボコフの英訳を対比しながら詳しく論じている。法橋が注目するのは“Отец семейства холостой”という三つのロシア語の連結が生み出す言葉の効果である。それによればここでの“семейство”とは普通の「家族」をさす言葉ではなく、「地主が所有する農奴の全家庭をもあわせた単位の総称としての意味を含」み、ナボコフの英訳の“bachelor paterfamilias”とはプーシキンの原文の意をくんだ「結婚もせず、農奴娘を邸にかこい、子をもうけている地主」という農奴制に対する批判的な意味を内包している。ゆえに、法橋は「ナボコフが家父長独裁の意味で『父』

¹³ Michael Eskin, *Nabokovs Version von Puškins „Evgenij Onegin“: Zwischen Version und Fiktion – eine Übersetzungs- und fiktionstheoretische Untersuchung*, (München: Verlag Otto Sanger, 1994), pp. 97-98.

¹⁴ ヴィッサリオン・ベリンスキー（小澤政雄訳）『プーシキン：近代ロシア文学の成立』光和堂、1987年、554頁。

¹⁵ 以後括弧内引用は *Пушкин А.С. Собрание сочинений в 10 томах*, Т. 4. М., 1975 を指す。

と『家族』を<paterfamilias>の一語にまとめあげたのはさすがである。この『家父長』訳はいずれの邦訳よりもすぐれている¹⁶とまずナボコフの訳語の選択眼を賞賛する。だが、一方で『未婚男子の家父長』ではそのイメージが整然としない。おまけにこの部分には注釈もない」とナボコフの訳語の難点も同時に挙げている。

ここで提出されているのは「優れた（文脈を伝える）訳語」と「注釈の不備」という矛盾した評価である。なぜこんなことが起こってしまったのだろうか。詳しく調べるために、まず訳語のほうから観察してみよう。法橋が指摘するナボコフの訳語に対する選択眼は、他の英訳者の訳文と比べたときによりはっきりする。手元にある6つの英訳（Babette Deutsch (1943), Charles Johnston (1979), James E. Falen (1990), Douglas R. Hofstadter (1999), Walter Arndt (2002), Tom Beck (2004))を調べると「家父長」という文脈を伝えているのは6人のうちではジョンストンだけである。他の5人の訳文は法橋が主張する意味では文脈を外していることになる。¹⁷ここで看取されるのはナボコフ訳の「普通でなさ」である。

ナボコフ訳を参照して1979年に出版されたジョンストン訳は、ほぼ同じ“paterfamilias (unwed)”という訳語を採用している。異なるのは、この訳にはしっかりと注釈が付けられていることである。マイケル・バスカーによって巻末にまとめられた注釈によれば、「家父長（未婚）“paterfamilias (unwed)”：社会的には結婚が許されなかった農奴の女性（あるいは複数、ひょっとしたら農奴のハーレム）を暗示している」¹⁸のであり、「未婚の家父長」という訳語の含むところを読者に説明していることがわかるだろう。

こうしたことから、次のような結論が出る。おそらくここで訳者がとる選択肢は二つ、原文の含むところをなにも知らないで（または知らないふりをして）訳してしまうか、あるいは原文の含みを察知して“paterfamilias”という言葉を出し、その唐突な語彙の含むところを19世紀ロシア事情に疎い読者のために注釈を付けるかである。

だが、ナボコフはそのいずれもとらなかった。可能性としては、こうした歴史的背景を知らなかった、というものだ。だが、それは法橋も指摘するように英語で正確な訳語を探して使用しているという事実と、そしてナボコフがロシアの地主貴族の家庭で生まれ育ったという事実と矛盾する。ナボコフは別の注釈でプーシキンが実際に農奴の女性に子供を生ませていたという事実に言及している（II 218）。また彼は先ほど列挙した訳者では唯一のロシア人であり、18歳で亡命を余儀なくされたとはいえ、もともとロシアの地主制

¹⁶ 法橋和彦「詩の言葉 散文の言葉」法橋『ロシア文学の眺め』新読書社、1999年、143-145頁。

¹⁷ もっとも、ほかの訳者たちは韻文体で訳出しようとしているので、意味よりも音を優先させているだけかもしれない。

¹⁸ Alexander Pushkin, *Eugene Onegin: A Novel in Verse, Revised Edition*, translated by Charles Johnston, introduction and notes by Michael Basker with a preface by John Bayley. (London: Penguin Books, 1979), p. 239.

についてのレアリアを持ち合わせていたはずの人物なのだ。

上記のように、ここでのナボコフの態度はどこかぎこちないものである。そこで必然的にもうひとつの可能性が浮上する。不在の注釈が示唆するもの、それはナボコフがこうした背景を正確に認識しながら、あえて無視し隠匿しているという可能性である。

5

前節では『オネーギン』における農奴制に関わる記述を見たが、普通、農奴制の特徴としては地主に農奴への徴税権が与えられていたことが第一にあげられるだろう。『オネーギン』には徴税に関する記述もいくつか登場する。たとえば第2章4連でオネーギンが伯父から相続した領地の税を「バールシチナ “барщина”」から「オブローク “оброк”」に変更する場面 “Ярем он барщины старинной / Оброком легким заменил; (32) / the ancient *corvée's* yoke / by the light quitrent he replaced; (I 127)” がある。

バールシチナとオブロークとはどちらもロシア農奴制における時代の一形態で、平たく言えばバールシチナとは一定期間、領主の土地で労働をしなければならない賦役であり、それに対してオブロークとはその分を生産物や貨幣で払う貢租である。この一節にナボコフは以下のような注釈を付けている。

19世紀前半の開明的地主は、マルクス主義者には信じがたいことだろうが、奴隷の境遇を楽にするために——しばしば自分の利益に反して——できる限りのことをした。彼らは数的には多くなかったが、結局はヒューマニズムが優勢になり、1861年、農奴は公式に解放されたのである。(II 224)

重労働であるバールシチナを税金であるオブロークに変えるということに、ナボコフは農奴の解放の兆しとプーシキンとオネーギンに共有されているロシアの進歩的な「自由主義」思想を見だし、そこに後の農奴解放令につながるものがあると主張する。その背景には「残酷さ」とは対極にある概念としてのヒューマニズムがある。ここでナボコフは政治性を剥き出しにして、当時の農村の保守的な封建制を批判するマルクス主義者に対して勝ち誇っている。あたかも、ソヴィエトもいつかはこのヒューマニズムの名のもとに屈することになるとでも言うかのよう。

この注釈での口調は確信に満ちたもので、注釈書の権威もあいまって私たちを信用させるに足るものだ。だが、客観的に見てその内容は事実なのだろうか。久保英雄はこの箇所が付された注釈を取りあげて「ナボコフはオネーギンがオブロークを採用した根拠をヒューマニズムにのみ見ており、さらに、それを農奴の解放と同一視しております。がはたしてそうなのか？」という疑問を提出し、詳しく扱っている。それによれば、「バールシチ

ナもオブロークも、農奴に課せられる封建地代という意味において、その法制史上の性格には、まったく変わりがない。く、「農奴に賦役ではなく貢租を課すことそれ自体を、無媒介的にヒューマニズムに結びつけることはできない」という。また久保は当時の知識人の風潮の中でのオネーギンの性格を分析し、農奴制を擁するロシアの後進性に批判的な目を持ちながら、一方では「利に聡い」オネーギン像を提出した上で、オネーギンが「道徳律・正義の原理としてスミスを理解した」その意味では「オネーギンがバールシチナをオブロークに替えた動機をヒューマニズムに見るナボコフの解釈は部分的には当たって」いるが、「オブロークの採用、つまり、農奴に課す地代形態の変更と、自由主義化、つまりこの脈絡の中でいえば、農奴の解放との間には千里の距離があり」、これは「ナボコフをもとらえた錯誤」であると批判している。¹⁹

注釈では「結局はヒューマニズムが優勢になり」としているが、農奴解放令はヒューマニズムにのみもとづいて行われたわけではなかった。それはクリミア戦争の敗北によってロシアの後進性に危機感を抱いた皇帝アレクサンドルⅡ世が、資本の発展に欠かせない賃金労働者を作り出すために多くの貴族領主の反対にもかかわらず行ったものだった。その結果、ナボコフが読者に信じ込ませようとしているように——オブロークの訳語にも“light quitrent”をあてていたが、これも「利に聡い」オネーギン像とは正反対だ——農奴たちが「完全に解放」されたわけではなかった。農奴たちの多くは「解放後」も土地に縛りつけられ、領主によって一部の人権を支配されていたままだった。農民には土地の所有が認められたが、そのための地代は非常に高額であり、長い時間をかけて支払わなければならなかった。また、農村共同体的秩序は依然として温存・強化され、徴税・徴兵・裁判といった権限が領主から共同体に移された。共同体に対する領主側の監督も存続した。

こういった事情を踏まえて、ヒューマニズムといった要素もあるとしながらも久保はナボコフが過ちを犯していると指摘している。²⁰ だが、ここで問題にしたいのはその「錯誤」が生み出されるに至ったプロセスであり、その「錯誤」は本当に無意識的な錯誤だったのかということだ。言い換えれば、ナボコフはここで確信犯的にこうした読みはずしを行っているのではないか。

こうしたことがなぜ起こるのか。その理由はナボコフの政治的な立ち位置に求められる。久保はナボコフを紹介するときに、「カデット党の領袖で、ロシアの自由主義を一身に表現していたナボコフの息子」と表現していたが、私たちはナボコフという作家をその出自

¹⁹ 久保英雄『歴史のなかのロシア文学』ミネルヴァ書房、2005年、44-60頁。

²⁰ この論文では法橋・久保といった論者の意見を用いてナボコフの主張の特殊性を浮き彫りにしようとしたが、もちろんナボコフの主張を咎める彼らの意見そのものが政治的なものである、ということも忘れてはいけない。他人の政治的なスタンスを論じるときにおうおうにして人は政治的な磁場にとられるというのが本論の主張であるが、本論もその危険を冒している。

にまでさかのぼって再考しなければならない。ナボコフの政治的なスタンスを理解しなかったために最終的に友情を破綻させてしまった例として、エドモンド・ウィルソンを挙げることができる。注釈書の作業中に書かれた手紙で、ナボコフはウィルソンの回想記において示されたロシアの歴史認識を厳しい口調でたしなめている。

しかしいつも困るのは、ロシア史に対する君の考え方で、君が若いときに心酔した古臭いポリシェビキのプロパガンダに基づいているから、まったくの誤りなのだ。19世紀ロシア作家たちをあれほどよく理解している君が、アレクサンドル1世の時代に始まり、19世紀を通してずっと顕著に存在していたのに、プロパガンダの理由からレーニン主義者やトロツキストによって意図的に軽視された *obshchestvennoe dvizhenie* (自由運動) をどうして無視できるのかわからない。²¹

口調の激しさもさることながら、驚かされるのはその論理の流れである。この一節から判断すれば「19世紀ロシア作家たちをよく理解」するためには「アレクサンドル1世の時代に始まり、19世紀を通してずっと顕著に存在していた」「自由運動」を理解していなければ道理に合わないとなボコフは心の底から信じているとしか思えない。

さかのぼってナボコフの19世紀のロシア作家たちについての文章を振り返ってみれば、自由主義への信念は目立たないながらも述べられていた。たとえば、1944年に出版された評論『ニコライ・ゴーゴリ』でナボコフは革命前のロシアの自由主義的な風潮について「ロシアの輿論はその本然からして民主主義的であり、ついでに言うておけば、アメリカに対して深い敬意を払っていた。いかなるツァーもこの気骨を折り砕くことはできなかった（これがソヴィエト体制によってへし折られるのは、はるかのちのことである）」と触れている。²² ここでナボコフは19世紀のロシアにおいてはむしろ民主主義こそが本流であり、世論——ここでの“Public opinion”の具体的な所在の典拠は明らかではないが——にも支持されてきたと読者を説得しようとしている。そして注釈にもあったように、ここでも皇帝とソヴィエト政権は自由主義運動を弾圧し、もみ消した独裁者たちとして同一視されている。

また、ナボコフがアメリカでした講義のなかでも同様のコメントは散見できる。たとえばコーネル大学で『アンナ・カレーニナ』について論じたとき、オブロンスキーが提唱する「完璧な自由主義」にはこう注釈を付けている。

²¹ ウラジーミル・ナボコフ、エドモンド・ウィルソン（中村紘一、若島正訳）、サイモン・カーリンスキー編『ナボコフ＝ウィルソン往復書簡集 1940－1971』作品社、2004年、422頁。

²² ウラジーミル・ナボコフ（青山太郎訳）『ニコライ・ゴーゴリ』平凡社ライブラリー、1996年、193頁。

トルストイ自身の「自由主義」という概念は、西欧の民主主義の理想や、旧ロシアの進歩的なグループの考える真の自由主義とは一致しない。オブロンスキーの「自由主義」は明らかにギリシア正教の側に立った考え方であり、月並みな人種的偏見についても、オブロンスキーが決してそれを免れていないことを、やがて私たちは見るだろう [後略]。²³

トルストイの志向する自由主義を偏見に満ちたものとして退けているが、もちろんボコフが「西欧の民主主義の理想や、旧ロシアの進歩的なグループの考える真の自由主義」のほうに自分自身を置いていることは間違いがないことだ。ここでもナボコフは自分が信じる自由主義を守ることに心を砕いている。

結局、ウィルソンとはこの『オネーギン』翻訳と注釈をめぐって喧嘩別れしてしまうことになるが、沼野充義がすでに指摘している²⁴ ように、こうしたロシアに対する政治的な意見に関する行き違いが二人の不和の伏線として張られていたことに注意すべきであろう。この二人の偉大な文学者の対立は審美的な価値観の相違からのみ引き起こされたものではなかった。

ここでウィルソンと同じ轍を踏まないためにも、私たちは『オネーギン』執筆時のプーシキンが置かれていた政治的コンテクストを観察するそのまなざしで持って、『オネーギン』注釈執筆時のナボコフが置かれていた政治的コンテクストを理解しようとしなければならぬ。ナボコフは作家としての前半生をV・シーリンというペンネームで通したが、これは同姓同名である父に気がつかったからだと言われている。作品の発表の場である亡命ロシア人社会では、父親は当然ながら有名人であった。そこで作品を発表する際に本名を用いていたのでは過剰な政治性を背負い込んでしまうことになる。²⁵

その後アメリカに渡って英語で執筆するようになり、ナボコフは自分の本名をとり戻すことができた。その一方で、アメリカにおいて彼はまた違った種類の困難に直面しなくてはならなかった。それは誰も彼の生い立ちや、今まで成してきたことを知らず、ただ亡命ロシア人であるという理由だけで「白系」や「トロツキスト」といった言葉でくくりたがり、ひどい場合には反感を抱く人々に作品を発表しなればならなくなったことだ。²⁶ 英語圏の読者の多くはロシアの歴史や文化についてあまりにも無知であった。

また、アメリカにきたことでナボコフがロシア亡命社会から完全に切り離されたかとい

²³ ウラジーミル・ナボコフ (小笠原豊樹訳) 『ロシア文学講義』TBSブリタニカ、1982年、266頁。

²⁴ 沼野充義「仲良しウサちゃん和大喧嘩」沼野『徹夜の塊：亡命文学論』作品社、2002年、125頁。

²⁵ こうした観点をすでに提出しているのは貝澤哉である。貝澤哉「ナボコフあるいは物語られた亡命：複数の読み・読みかえの位相」『越境する世界文学』河出書房新社、1992年、315頁。

²⁶ 当時の欧米の人々が亡命ロシア人に対して抱いていた嫌悪感については諫早勇一「亡命と文学：第一次ロシア亡命文学をめぐって」望月哲男、中村喜和、川端香男里編『スラブの文化』弘文堂、1996年、240-241頁にコンパクトにまとめられた記述がある。

えばそうではなかった。多くの同郷の亡命者たちと彼は依然コンタクトをとり続けており、²⁷ 亡命ロシア人向けの雑誌に論文や詩を發表するなどの活動を続けていた。

ナボコフが書いたテキストを読む際には、こうした複雑なコンテクストを理解しなければならない。ナボコフにとってなによりも耐え難かったのは、英語圏の左派インテリ層の多くは、革命以前のロシアでは農民・労働者たちは専制君主の下で虐げられそこには自由と呼べるものはなかったと見なしていたことだった。それは自らの故郷を不当に奪ったボリシェビキに正当性を与えてしまうことになり、ロシアに自由をもたらそうとした父の努力を無にすることであり、貴族の長男として享受した自分の少年時代を汚してしまうことになるからである。

ナボコフは 1919 年から 22 年までケンブリッジで大学生として過ごした。このイギリス時代については自伝においても記述が少ないが、「ロシアの過去についてごくわずかしかなかった」学友たちの帝政時代のロシアに対する蔑視と当時のソヴィエトへの賞賛に対する不満が述べられた一節はひとときわ目を惹くものである。

ツァーリたちの支配下では [中略]、本質的に馬鹿げた残忍な統治にもかかわらず、自由を愛するロシア人は、レーニン支配下とは比べ物にならないほど意見を表現する手段を持っていたし、また表現しても危険でなかった。1860 年代の改革以後、ロシアは西欧のどこの民主主義国でも誇りにできるような法律と、専制君主でも恐れるくらいの活発な世論と、広く読まれる、さまざまなリベラルな政治思想を説いている雑誌 [中略] を持っていたのである [後略]。²⁸

ナボコフは過去にさかのぼって、友人の偏見を念入りに反駁している。それはもちろんそのまま、これを読んでいる英語圏の読者に向けられたものでもある。述べられている「1860 年代の改革」とは農奴解放令のことだろうが、ここでもナボコフはそれを過剰に評価している。ちなみに、この箇所はロシア語版の自伝『向こう岸』では大幅に縮小されている²⁹ が、この一節が英語読者を強く意識して書かれたことの一つの証拠だろう。

ケンブリッジでの大学生活の間、認識の落差に絶望していたナボコフは、アメリカにおいても同じギャップをウィルソンとの間にも感じとっていた。当初、新天地での生活費を文筆活動だけでは十分に得られなかったため、教職やロシア文学の紹介で稼がなければなら

²⁷ 比較的最近になってナボコフのロシア語書簡が公開されているが、その中にはアメリカ時代のものもある。例を挙げれば、В. М. Зензинов (В. В. Набоков: Pro et Contra. Спб., 2003. С. 65-96) や М. В. Добужинский (Звезда. 1996. №11. С. 95-108) とのものなどがある。またナボコフはストルーヴェなど自分と政治的な立ち位置に近い人間とは終生友情を保ったことは明記すべきことだろう。

²⁸ Vladimir Nabokov, *Speak, Memory: An Autobiography Revisited*, (New York: Vintage International, 1989), pp. 263-264.

²⁹ Набоков В.В. Собрание сочинений русского периода в 5 томах, Т. 5. Спб., 2003. С. 304-305.

らなかったナボコフにとってこれは重要な問題だった。『オネーギン』執筆中だった 1958 年に行った講演の中で、ナボコフは自伝における自由主義についての主張を「革命前のロシアにおける自由主義思想の発展という問題は、今世紀 20 年代から 30 年代にかけての狡猾な共産党員たちの宣伝によって、外国人の目には全く不分明な、歪んだものにされてしまった」と繰り返している。また、ボリシェビズムにつながる社会思想的な自由主義と「真の」自由主義を峻別するように聴衆であるアメリカ人たちに語りかけている。そして「ロシア自由主義の正統」に属する作家として「19 世紀 20 年代、30 年代における芸術家と批評家の軌轢の好例として、ロシアに初めて現われた大作家、プーシキンの実例がある」³⁰としている。ナボコフにとってプーシキンが特別な存在であったのはその芸術が卓越していたからだけではなく、彼が「ロシア自由主義の正統」に系譜に位置する作家であったからだ。一方で、ナボコフが『オネーギン』注釈で行っていることもまたこのあまり言及されることのない講演と同様なのではないだろうか。『オネーギン』の解釈をめぐる行われている論争、それは表だって主張されている「美的—政治的」、「テキスト論的—歴史主義的」といった次元だけではなく、純粹に「政治的」な闘争といった面も暗黙のうちに含まれているのである。それゆえ、ナボコフが読むロシア文学はある意味では若干屈折したものとなってしまった。彼がロシア文学を読むとき、そこには農民を虐げる貴族など登場してはならなかった。もっと正確に言えばそうしたものは主題化されてはならず、すみやかに視界の外にご退場願わなければならなかった。逆に、自由主義運動は微妙な形で強調された。

私たちはこうした観点からナボコフのロシア文学に関する仕事を再評価する必要があるだろう。なぜ彼がドストエフスキーを排してトルストイを崇めるのか、その理由が純粹に審美的なものなのかよく考えてみなくてはならない。それは文学というものを通じて、異国の読者に彼の父親が成し遂げようとしたことの正統性を遠まわしに訴えようとする行為にはかならない。インタビューで答えているように、少なくとも政治に関するかぎり、ナボコフは父の代理人だったのだから。むしろそれは作家という一人の人間から政治性や審美的な価値観だけを取り出して評価することができるのかという文学における本質的な問題につながってくるだろう。

もちろんこうした政治的な注釈は巨大な注釈書全体の中で見れば、わずかな割合をしめているに過ぎない。だがそれにもかかわらず、この翻訳と注釈書を読む上でこうした見なおしは重要である。なぜなら、それはナボコフがどのような意識を働かせてこの翻訳と注釈を作ったのかという動機の問題へと直結するからである。そしてその議論はナボコフの作品全体にさえ拡張できるものだ。最後の節ではそのことを示すひとつのささやかな読み

³⁰ ナボコフ『ロシア文学講義』4-8 頁。

方の例を挙げてみることにする。

6

今まで述べてきたような現象は、ナボコフ自身の自伝や創作を読む段になって私たち読者の身に現実の問題として降りかかってくる。それはテキストを読む私たちがナボコフの见えない政治力に囚われているのではないかという問題である。読者にとって厄介なのはこうした現象がおこるのが、しばしばナボコフの魔力が最高点に達し、文体の力で私たちが完全に魅了する瞬間だということだ。ここで例として取り上げてみたいのはナボコフが自らの人生に付した注釈書とでも言うべき書物、『記憶よ、語れ：自伝再訪』の第1章の末尾の有名なシーンである。このシーンは一家がヴィラの邸宅に滞在中に起こったエピソードを描いたもので、少年ナボコフは自宅の中にいながら部屋の窓から舞いあがる父親の姿を目撃する。

三度、目に見えない放り投げる人々の力強いかけ声に合わせて、彼はこのように舞いあがったが、[中略]最後の一番高い浮遊では、それが永遠であるかのように、コバルト・ブルーの夏の昼下がり体にたもたせかけているかのようにだった。ちょうどその姿は教会の丸天井の下で、服をしわでいっぱいにして心地よさそうに舞いあがる天国の住人のようだった。一方その下ではひとつひとつ、ひとつひとつの手の中の小さなろうそくにかすかな炎の群れがともされ、司祭がとこしえの安らぎの歌をうたい、吊いの百合が揺らめく灯りの中で開いた棺に横たわる人物の顔を覆い隠すのだ。³¹

屋敷を訪れた農民たちによって胴上げされ、空中に舞い上がった父親は永遠に一時停止したまま棺の中へ消えていく。この輝かしい光景は、多くのナボコフ愛好者の胸に一枚の写真として焼きついていることだろう。若島正が指摘した「反重力の想像力」³²の典型とも言えるようなこの描写は、線状に流れる時間を文体の魔力で寸断してしまう。こうした文体による魔術はナボコフ以外の誰もなしえなかったことであろう。

ボイドの評伝でも、このエピソードは言葉の魔術を示すものとして冒頭に紹介されている。ボイドはこの一節こそ、自分の記念碑的な伝記の導入にふさわしいと考えたのだ。未亡人ヴェラや息子ドミトリイなどの信頼と協力を得て、数々の未公開資料を閲覧するという恩恵を受けて書かれ、上下巻合わせて1400ページにも達するこの労作が、ナボコフ研究のひとつの達成点であることは疑いようもなく、ボイドがナボコフ研究の第一人者とさ

³¹ Nabokov, *Speak, Memory*, pp. 31-32.

³² 若島正「反重力の想像力：ジョイス、ナボコフ、カルヴィーノ」若島『乱視読者の帰還』みすず書房、2001年、358-368頁。

れるのもこの一組の評伝によるところが大きい。それはナボコフ研究を志すものなら誰しも傍らに置き、参照しなければいけない基本文献になっている。その輝かしい書物の冒頭で、この輝かしい描写をボイドは以下のように解説する。

ここでナボコフは（すぐれた読者はすぐに気づき、『記憶よ、語れ』の読者ならだれでもやがてわかるように）のちになって自分の人生に降りかかるある瞬間、すなわち、開かれた柩に横たわる父を見下ろす日を予告しているのだ。天に舞い上がる男の最初のイメージは、話の端緒から逸脱しているようにみえるが、永遠に空にとどまるかのように浮かんだ人物から、棺台の上の死者へと下っていく文章には、偶発的なところも、恣意的なところもまったくない。³³

ボイドも放り上げられて静止した父親がいつの間にか『記憶よ、語れ』の後半で描かれる父親の死のイメージへとナボコフの「文体の魔力」によって移行していくことを述べている。そしてこの挿話を評伝の導入部に置くことによって、下巻で描くことになる作家の死をも示唆している。

ここでボイドの解釈はまぎれもなく一つの「正解」であり、ナボコフが予期した「模範解答」の一つでさえあるだろう。だが、正直に告白すればまさに「正解」であるがゆえに一抹のナイーブさ、あやうさを私は感じてしまう。ボイドがなぞっているのはある意味で「ナボコフはナボコフだ」というトートロジーの袋小路であるからだ。そしてそれは全体の基本線になってしまっている。だが評伝の権威をふまえたうえで、誤解を恐れずに言えば、その意味でボイドの評伝はナボコフの用意した「ベビーベッド」から一歩も出てはいない。ナボコフのような癖の強い作家において、読者は二通りの反応を示すことがあらかじめ決定されてしまっている。一つは拒絶反応。そしてもう一つはそれが提示する世界にすっかり取り込まれてしまうかだ。それは言いかえれば、かつてナボコフじきじきの許しを受けて伝記を執筆したものの、事実と反した記述を繰り返したため「破門」されたもう一人の伝記作者フィールドのようにナボコフの芸術についての的外れな批判をするか、それを信じ込んでしまうかの二通りしかないことになる。

しかし、ここではこの「ベビーベッド」から抜け出す方法はないのか、もう一度模索してみることにしよう。この章の始めで、わざとボイドの評伝通りに自伝から引用をおこなってみた。ここでもう少し「見通し」を良くするために、引用の範囲をもっと広げてみたい。このエピソードは前述したとおり『記憶よ、語れ』第1章の最後を飾っている。しかし、多くの読者は忘れていたかも知れないが、このエピソードが含まれる第1章5節はこう始められるのだ。

³³ ブライアン・ボイド（諫早勇一訳）『ナボコフ伝：ロシア語時代（上）』みすず書房、2003年、6頁。

今世紀のこの奇妙な最初の十年間には古いものと新しいものが、リベラルな空気と家父長社会的な空気が、致命的な貧困と宿命的な富が、めちゃくちゃにごたまぜになっていた。私たちが [中略] 一階のダイニングルームで昼食をとっていると、[中略] 執事のアレクセイがはいつてきて、体をかがめて、父に低い声で [中略] 村人たちが旦那様に会いに外に来ていますと告げるようなことが、ひと夏のうちに何度かあった。[中略] 目に見えない一団が目に見えない父に挨拶を始めると、その方向から、農民たちの丁寧な挨拶の音ががやがや私たちの耳に聞こえてきた。[中略] おそらくそれは村のいさかいごとに父の調停を頼みに来たり、なにかの特別な補助金のことで話に来たり、あるいはどこかの畑の刈り入れやどこかの森の伐採の許可を貰いに来たりしてのことだったのだろう。そうした願いはだいたいいつもすぐに聞き入れられるのだったが、そうすると、またあのがやがや声が聞こえてきた。そして一同の感謝のしるしとして、いい旦那さまは、多数の力強い腕で揺られ、放り上げられ、無事にまた受け止められるというわが国伝統の試練を受けねばならなかった。

ダイニングルームでは私と弟はきまって食事をつづけなさいと小言を食った。母は食べかけのひと口を人差し指と親指ではさんだまま、食卓の下をちらとのぞいて、神経質で怒りっぽいペットのダックスフントがいるかどうかたしかめる。昔の母の家庭教師で [中略]、気取り屋の、なにごとにも悲観的な、年とったゴーレイ夫人は、「いつか彼らはきっと彼を落っこしますよ」とフランス語で言う。³⁴

まず目を引くのがこの節の最初の文である。ナボコフはこのセンテンスで「古いもの」と「新しいもの」、「リベラルな空気 “the liberal touch”」と「家父長的な空気 “the patriarchal one”」と「致命的な貧困」と「宿命的な富」を対置してみせる。ここで使われている “patriarchal” という形容詞が “paterfamilias” の同義語であることは言うまでもない。そして、それと対になる概念としてもちいられているのは “liberal” という形容詞である。もちろんこの「リベラル」とは、ナボコフが注釈の中で主張していたロシア貴族が専制的な皇帝に対抗して 19 世紀のあいだ保持してきた伝統ある「真実のリベラル」だ。そして、この「リベラル」という形容詞は、ほとんどナボコフの出自を語るときの枕詞と化していることに注意しよう。それはボイドの評伝の第 1 章のタイトルが “Liberal Strains: The Patterns of the Past” であることからもうかがえることだ。

こうしたロシアの二面性は、20 世紀の最初の 10 年間——いわゆる「銀の時代」——になって初めて出てきた特徴ではない。世紀末から 20 世紀の初頭はそれが顕著になった時期には違いないにせよ、限られた階級が享受する富とその他大勢の農民たちが味わってきた貧困や、西ヨーロッパ経由の自由主義と土着の封建的な農奴制はロシアが長年ひきずっ

³⁴ Nabokov, *Speak, Memory*, pp. 30-31.

てきた問題であったはずだ。そして、本来は切り離せない二面性のうちナボコフがどちらを読者の前に一貫して提示し続けているかは明白なことだろう。

自伝の記述に戻ると、ヴィラの邸宅で食事をするナボコフ家の団欒のひと時は、領地の農民たちの訪問によってたびたび中断されたことが記されている。農民が来たことを申し訳なさそうに父ナボコフに告げる執事。ナボコフの母はといえばこのさして珍しくもなかっただろう空中浮遊の生み出し手たちよりも、ペットの気難しいダックスフントを気にしている。この空間に流れている家族の奇妙な無関心さと静的といってもいい雰囲気は、この「儀式」がありふれたものであったことを裏付けている。

ここで注目したいのは“invisible”という形容詞によって文字通り「不可視化」されてしまっている農民たちである。おそらく通常のナボコフならば、彼らの服装から年恰好などをありありと描写したことであろう。だが、ナボコフはそうしない。それは少年ナボコフが貴族らしい厳しいしつけによって席に縛り付けられているからであるが、もうひとつの重要な理由は、少年ナボコフの座しているこの「眺めの悪い部屋」こそ、実は作家ナボコフがしばしば使う文学的装置だからである。ここでナボコフは農民が「見えない」のではなく、「見ない」ことを消極的な形ながら選択している。読者を自分のイマジネーションが作り出した空間に閉じこめてしまうために。

まさにこの現象と同様のことが『オネーギン』翻訳と注釈でも起こっている。ナボコフ作家としての強すぎるイマジネーションと魅力的な文体は、それを作り出さずにはいられないのだ。ゆえに、私たちはナボコフの作品を読むとき自分がどこにいるのか確認して見る必要があるだろう。私たちにナボコフが与える情報は時に故意に限られた種類の情報である。ゆえに、時に書かれていないものを読もうとすること、見えないものを見ようとする必要があるのである。

ここでさらに立ち止まって、空中浮遊の前の描写をよく読めば、農民たちがわざわざ領主である父のところに来た肝心の理由も書かれている。「おそらくそれは村のいさかいごとと父の調停を頼みに来たり、なにかの特別な補助金のことで話に来たり、³⁵あるいはどこかの畑の刈り入れやどこかの森の伐採の許可を貰いに来たりしてのことだったのだろう」とのことだが、これは共同体としての村に領主の存在が果たす役割が少なくなかったことを意味している。もちろんナボコフは領主側の善意を強調するが、注釈での主張とはズレがある。

こうしたことを前提に先に引用した父の浮遊シーンをもう一度再読してみれば、美しい光景の背後にこめられている一種の不気味さを感じとれるはずだ。目に見えない無数の手によって望んではいない空中浮遊を強いられている父ナボコフ。彼にできることといえば

³⁵ この「補助金」に関する記述はロシア語版では存在しない。

落下の衝撃に備えて体をこわばらせることしかない。もちろん、こうした両者の絶妙な力関係にもとづいておこなわれていた伝統的な胴上げが、作家ナボコフが 40 年後の未来から望むように永遠に続くわけはなかった。この場にいるただ一人の部外者であるフランス人家庭教師ゴーレイ夫人だけが、その光景のもつ意味——ある種の異様さを客観的に捕らえている。そのなにげなく発せられたフランス語の台詞、「いつか彼らはきっと彼を落っことしてしまいますよ」は奇しくもロシアという国がたどった運命への予言になってしまっている。そして作家ナボコフが与えてくれる情報からは、三度目に空高く放り上げられた父親が、はたして現実に小作農たちの骨ばった、だが日焼けしてたくましい腕に再びうけとめてもらえたのかどうかすら、私たちにはわからない。しかしながら「歴史的な現実」は、革命が起こると、この壮麗なヴィラの邸宅もまさにナボコフの父親を胴上げした同じ農民たちの手によって焼かれてしまったことを伝えている。

7

本論では『エヴゲーニイ・オネーギン』というテキストを一種の鏡として用いることで、そこに映ったナボコフの政治観を描出しようと試みた。そして、それを援用してナボコフの作品の解釈に役立てる方法を模索した。もちろん、こうした「ナボコフと政治」といった大きなテーマはひとつの論文で片がつく問題ではないし、またそもそも「作家と政治」あるいは「文学と政治」といったテーマが一種の「呪われた問題」として特に欧米の洗練された研究者の間では忌避される傾向のある問題であることも忘れるわけにはいかない。特にナボコフのような作家の場合、こうした「泥臭い」問題よりも彼の残した華々しい芸術がそれぞれの時代に応じたトレンドの下で研究される傾向がある。しかし作家も人間である以上、政治から完全に自由であるわけにはいかず、その痕跡は作品にも残されているはずだ。その意味でこの問題は解決済みの問題などではなく、折りに触れて回帰すべき問題である。それはナボコフをいかに脱神話化するのかという問題にも繋がってくることだろう。

本論では従来の芸術至上主義者というナボコフ像に対する反証としてナボコフの政治観を提出したが、それが単純に（ソ連から見て）保守反動的であったと指摘するだけでは発展性はないだろう。それがいかにナボコフの芸術観に影響を与え、作品と不可分になってひとつの文学世界を形成しているかという探求がなされたときに、その主張は初めて生産的な議論になる。本論では最終節で自伝を例にとってそのアプローチの糸口を試みたに留まったが、この問題は今後一層の研究がなされるべき領域だろう。そのための布石として将来この論文が寄与することを期待する。

Комментарий, который Набоков не написал: Политические взгляды в комментариях В. В. Набокова к роману А.С. Пушкина «Евгений Онегин»

АКИКУСА Сюньитиро

В статье затронут вопрос о политических взглядах Набокова в комментариях к роману «Евгений Онегин». Что касается идеологических взглядов Набокова, крайне мало предшествующих исследований, потому что обще известно, что Набоков никогда не имел интереса к политике и ненавидел литературу, которая занимается вопросами политики, как это делала советская литература. Набоков определяет роман «Евгений Онегин» как явление стиля и показывает многие аллюзии к французской и английской литературе, к тому же, в комментариях к «Евгению Онегину» он неоднократно высказывается против идеологического толкования советских исследователей того времени. С эстетической точки зрения Набоков опровергает мнение, что Пушкин были прогрессивным писателем большевизма. Но Набоков так активно выступал против марксистского толкования советских исследователей, что комментарии стали полем идеологического боя.

Однако, несмотря на такое отношение к политике, в комментариях Набокова иногда проскальзывает идеология. Так, например, он окончательно определил Пушкина как «старомодного либерала», а также, в одном интервью Набоков декларировал, что он сам старомодный либерал, как и его отец, который перед революцией основал кадетскую партию и был убит монархистом в Берлине. Таким образом, в комментариях Набоков навязывает тексту свои политические принципы.

Кроме того, комментарии Набокова приводят иногда к преувеличениям и натяжкам, отягощая особым смыслом такие детали, которые, несомненно, соответствуют его осмыслению либерализма. Например, в комментариях Набоков посредством писательского воображения насильственно связывает диктатуру Петра Великого и Александра I с большевизмом и ленинизмом советского времени. Вместе с тем, в комментариях Набоков переоценивает освобождение крепостных в 1861 году и тогдашний либерализм дворянства, несмотря на то, что на самом деле это освобождение было обусловлено не только либерализмом, но и кризисом, вызванным поражением страны в Крымской войне. Более того, Набоков, как представитель дворянства, должен был знать, что Крестьянская реформа не полностью освободила крепостных крестьян, и помещики продолжали контролировать

крестьян. Сверх того, в комментарии Набоков иногда специально пропускает нужные сведения, которые демонстрируют жесткую действительность крепостного права и неудобны для его либерализма, несмотря на то, что он точно понимает и переводит текст «Евгения Онегина». Следовательно, чтобы узнать политические убеждения Набокова, нам нужно увидеть, что Набоков оставляет за пределами своего громадного комментария.

В Европе и Америке Набоков разочаровался в западных интеллигентах, которые считали, что в России не было либерализма до революции и презирали Набокова как цариста или троцкиста. Поэтому Набоков, с одной стороны, притворяется равнодушным к политике, с другой стороны, не снабжает текст аннотациями, которые указывают на жестокость крепостного права, и подчеркивает либерализм. Такое противоречивое отношение к политике Набокова было обусловлено тем, что ему необходимо было выжить в качестве эмигрантского писателя. Следовательно, мы можем рассматривать перевод и комментарии Набокова как «пропаганду» общественного движения. Из этого следует, что мы отмечаем недостатки прежних исследований о Набокове.

В своей автобиографии Набоков написал, что крестьяне часто умоляли владельца поместья, отца Набокова, посредничестве между поссорившимися. Так, описание русской жизни в его автобиографии иронически показывает патриархальную отсталую Россию и отчетливо противоречит его комментариям. Кроме того, когда Набоков описывает зрелище, как крестьяне подкидывали его отца в воздух, с одной стороны, он живо изображает «замечательный случай левитации» своего отца, а с другой стороны, старается не показывать читателям реальных крестьян, чтобы отвлечь их внимание от русской действительности.